

# ハイスクールDxD～黒の 墮天使と炎氷(えんひよ う)の弱騎士

シュオウ・麗翹

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

pixivからこっちに移転しました。pixiv名はシユオウの名前の由来であるシユロウガです（・・ω・・）

割かしグダグダだと思えますが宜しければどうぞ

# 目次

墮天使との出会い	1
デートする前の2人	11
デート本番と神器	17
リスフィール!!空からケンタウロスが!!	26
バイサー、初めての散歩	32
レイナーレの翅をもつふもふ	38
セブンソードプロダクション	42
設定その1	46
オカルト研究所とピザ大好き炎の龍	50
勧誘か会談か怪談か	54

転入生現る	60
喧嘩するほど仲がいい?	65



## 墮天使との出会い

駒王町のとある学校。元々は女子校だった私立駒王学園は共学になり、男女比は女子の方が多いものの、男子の入学が増えてきたという。

さらにその学校には有名人がいるという。

まずは学園のアイドルみたいな存在である駒王学園二大お姉様。

1人はリアス・グレモリー。真っ赤に燃え盛るような長い髪と美しい外見、抜群のプロポーションといった風貌で学園の憧れの的である。

もう1人は姫島朱乃。リアスに負けず劣らずのプロポーションと大和撫子といった風貌。どちらも……特に女子生徒達の間では憧れの的である。中にはファンクラブが密かにあるくらいに。

次に、悪い意味で有名な通称変態3人組である。

3人はいつも集まってはAVの話だのおっぱいだのなんの恥ずかしげもなく公共の……しかも人がいようと構い無しにエロの方面の話友達とだべるくらいの声量で盛り上がって話すのだ。

覗きを何度もやって、何度も懲らしめても降参する様子はなく、しかも以前よりも燃

えているといった訳が分からない方向でぶつとんでいる。

曰く、生徒は女子を見てスリーサイズが分かる。

曰く、完璧な女子のパンチラを写真に収める。

曰く、いつでもどこでもおっぱいを連呼している。

悪い意味で有名な3人組は今日も女子生徒から報復を食らっている。

そしてもう1人。学園のムードメーカーと呼ばれている今作の主人公である竜胆飛斗（リンドウアスト）。

桜色の髪を長く伸ばしてすやすやと机に伏して気持ちよく眠っている。

ヨダレを垂らして「むにやむにや……デインには……まだ新機能が……」と寝言を言っているほどだ。

顔の見た目は成長途中の女の子のようだが……彼は男である。

今の飛斗の雰囲気や顔を見てもどう見ても女にしか見えない。

男子生徒の制服を着ているが、彼が着ていると【女子が無理して男子の制服着てます】といった感じだ。

この風景がいつもの流れである。

今日も学園で日常を過ごしているのだ。

ところ変わって、ボロボロの廃教会。そこには4人の墮天使が住んでいた。

トレンチコートと帽子を見に纏った紳士風の男はドーナシック。決してドーナツでは無い。

なかなか渋い見た目をしており、不敵な笑みを浮かべている。

ゴスロリ風の服を着た金髪ツインテールの少女はミッテルト。小悪魔的な笑みを浮かべているいたずらっ子のような見た目の墮天使だ。

ボディコンスーツを身にまとった青髪の女はカラワーナ。妖艶な雰囲気醸し出しているいちばん身長の高い墮天使。

そして最後に、この中でいちばん露出が高いボンテージを身にまとっているのはレイナーレ。4人のリーダー格である墮天使だ。

「じゃあこれから出かけるわね。」

レイナーレが3人に言って教会から出る。

「レイナーレ姉様……気をつけるっス。」

3人の言葉を代弁するようにミッテルトが言った。心配そうな目でレイナーレを見ている。

「ええ。全てはあの計画のために……。」

そう言ってレイナーレは駒王町へ向かった。

計画のため、神器を持った人間を殺す任務のため

「あ〜う〜……。学校も終わったあ〜!!」

飛斗は大きく背伸びをして身体を伸ばす。正直、授業は退屈だった。

話は聞いて、ノートにとるものの、それだけだ。

早めに終わらせては暇になり、合間を見つけて落書きをする。今回はペンギンさんをノートの端っこに書いた。

「さ〜て……。かえろ☆」

バッグを持って校門へ向かう。

明日は土曜日。学校も休み!!ゴロゴロして好きなアニメを見て過ごすぞー!!と、八重歯を見せてニコニコしながら帰る。

「はえ〜。……。あり?……。あの人、ここの生徒なのかな?」

駒王学園の生徒が着る制服ではないが、ここの校門の前で待っている女の人の。

服越しがらでもわかるようなスタイルの良さ。モデル家業でもしていると言ったら

すぐに納得出来そうなものだ。

「う〜ん……難しいことはわかんないや☆早く帰ってロボットゲームやるぞ〜☆」

おー!!と言った感じでニコニコしながら帰る飛斗。自分じゃなくて別の人を待つているだろうと考え、その場を離れようとする。

この学園の人を待つているのなら確率は数百分の一、自分が当たる確率は相当低いものだ。

飛斗の中には目の前の美少女よりもメカが好きだ。ゲームが好きだ。獣が好きだ。

何度もファンタジー物語の生物やSFのメカを想像しては子どものようにはしゃぐ男だ。

ちなみに彼の好みの女の子は一誠達に聞かれた時こう答えた。

『う〜ん……片目隠れでツリ目で高身長の人かなあ……。クールでかつこいい系ならなおよし☆』

だそうだ。

答えてそんな話で盛り上がるとした時にクラスメイトの女子に手を引つ張られて席に戻された。

『あ〜れ〜』とふざけたようなノリのいいような声を出しながら。

校門を通過してそのまま帰ろうとすると、腕を掴まれたような感じがした。

「あれ？前に進まないや」

しかしこの男、理性が蒸発しているとされるほどバカなのである。

成績は学年半分よりもちよつと上のくらいなのだが、如何せんどこか脳筋な部分がある。

例えば、歩いてる時にバッグが引つかかると確認してほどけばいいものを引つ張つて解決しようとする。

コンビニで買った月見うどんについている生卵が割れなくて思いつきりやつたら中身をぶちまける。

「あ……あれ……？前に進まないぞ〜？」

だから後方確認もせずに強行突破しようとする。本人にはそのつもりは無いが。

「ちよつ……!!なんなのこの人……!!見た目と違って力強すぎ……!!」

引つ張つてる本人の美少女も通り過ぎようとする飛斗の腕を引つ張るが、その力に押しされてしまう。

下校中の生徒がこれを見て

「腕引つ張られてることに気づかないのかな？」 「傍から見ると百合だよな、アレ」

などといった声が聞こえる。もちろん、飛斗も美少女もその声を気にしている余裕は無く、両方とも無理やりやろうとする。

「り……竜胆飛斗さんですよね……!!」

疲れたような声で飛斗の名前を呼ぶ。

それを聞いた飛斗はぴたつと動きを止めて後方確認をする。

「……あり？ボク、今名前呼ばれた？」

こてんと、首を傾げる様は絵になるほど女の子に酷似している。

なるほど、これでは女と間違われるのも無理はないと、ひとり納得する。

「はあ……はあ……付き合ってる人とか……いますか……？」

先程のやり取りで息切れを起こしている美少女。その問いに飛斗は

「いや？ボクってば……ほら、魔法使い目指してるし☆」

ケロつと答えるのであった。

「ま……魔法使い……？」

「え？30まで童貞守り続けると魔法使いになれるって聞いたよ？……ファンタジーものの魔法なんてオトコノコのあこがれだよね☆」

あはは、と答える飛斗。目の前の見た目美少女の男が発言の意味がわからないが、すぐに平静を取り戻す。

「わ……わたし……天野夕麻と言います……!!貴方の事をずっと見てました……!!付き合ってください!!」

「え？付き合うって買物に？それとも毎日味噌汁飲んでください的なアレ？」

いつも脳天気な彼とは思えないほどの戸惑いっぷりを見せる飛斗。

「後者の方です!!ど……どうですか……？」

飛斗は後者の方です!!と言われた際には顔をゆでダコのように赤らめた。

本人自体、告白されたこと自体が初めてだ。女子生徒からは同性のように扱われ、男子生徒からは異性ののように扱われることが多い。

「え？いいよー」

何事も無かったかのように、スラスラと返事を返す飛斗に周りからの歓声が凄かった。

(ふん……男なんてこんなものね……すこし言葉を投げかけただけでコロツといつちやう……てかアレ本当に男なの!?そこの女子生徒よりも可愛いじゃない……!!)

飛斗はケロッとしているが、やはり自分の外見に自信があるのか、ふふんと心の中でドヤる。

内心、不愉快極まりなく齒軋りをする天野夕麻。生まれてくる性別を間違ってるという見た目。

若干ツリ目ながらもそれが負けるほどくりくりした幼い瞳。さらには童顔が可愛らしさに拍車をかけて男らしさなどは微塵もなく、いるのは見た目美少女の性別詐欺の才

トコノコ。

ちなみに今夜は満月らしい。

「ねえ、飛斗くん、今度の日曜日はヒマ?」

「え? ヒマ……なのかなあ……」

うーんと考える仕草をする飛斗。

ポンつと手を叩いてポケットからスマホを取り出す。

「うん、ヒマだね☆」

平常を取り戻したのか、ケロツとする飛斗。

それを見た天野夕麻はほっとした感じで胸を撫で下ろす。

そこからデートの約束まで（天野夕麻が）とりつけ、日曜日にデートする事が決まった瞬間であった。

「あつ、帰るのちよつと待つて!!ボクの自慢のペットをみてよ☆」

ハイテンションな感じでグイグイ詰め寄る飛斗は天野夕麻の腕を組んで詰め寄る。

「ひゃつ……!!」と可愛い悲鳴が聞こえるが、すぐに平静を取り戻す天野夕麻。

「な……なんですか……?」

「これ、ボクの自慢のペットなの☆どうだい?かわいいだろ?」

子供が新作のおもちゃを買ったように嬉しそうな表情をする飛斗。

彼のスマホの画面を見ると……

体の前半身が驚、後半身が馬の生物が写っていた。しかもそれに乗って庭を駆け回る子供時代の飛斗の姿も写っている。

「え？グリフォン？」

天野夕麻は額に汗を垂らして飛斗に問いかける。

「似てるけど違うよ☆この子はヒポグリフのリスファイル、空から落ちてきたのを拾ったって言ってた☆」

そんな話を聞いて天野夕麻はええ〜!!と叫び声を上げたという。

## デートする前の2人

日曜日、デート当日。

街中が休みで賑わう中、天野夕麻は待っていた。

「……遅いわ……」

彼女は待ち合わせ場所に時間30分前から待っていた。時間まであと5分位ある。

流石に早く来すぎたか。はあ……とため息をつく。

「私って、意外とせっかちなのかしら？」

自分を見直すきっかけが出来たと思うことにし、飛斗を待つ。

(待っていなさい……!! 竜胆飛斗!! 貴方から神器を抜いて私はアザゼル様からの祝福を受けるのよ……!!)

内心、黒い笑みを浮かべていてかつ表情もすこし悪どい感じな笑みを浮かべている。

少しは夢を見させてから落とす。一誠にもやって見たらおっぱいが好きとか言っ

たくせに見せた瞬間に腰を抜かして恐れたのだ。

全く腹ただしい限りだ。

本日の彼女の服はシンプルに白のワンピースとピンクのカチューシャといったもの。

シンプルだからこそ彼女の美貌がより光るといふものだろう。実際、彼女を見たものは2度見するくらい綺麗なだった。

「ごめ〜ん、待った〜?」

後ろから飛斗の声が聞こえる。時間ギリギリとはいえ、ようやく来たかといった思いが大きく、1回文句でも言ってもやろうと後ろを振り向くと……

竜胆飛斗がいた。昨日の制服とは違い、ラフな格好だ。

だが気合を入れたのか、多少凝ってる服を着ていた。

フリフリのドレスのような衣装。胸から上は露出しており、胸元には黒いバラのコーサージュがある。

服とスカートは繋がっていて、なおかつフリフリにも程があった。

そして、彼の頭にはうさ耳のカチューシャ。

衣装だけを見ると、不思議の国のアリスのような格好だ。

「ちよつと待つて!!これって明らかに女の子がするような格好じゃないの!?!しかも乗ってる生き物なんなの!?!」

キャラを忘れて突っ込む天野夕麻。

そう、彼は歩いてきたのではない。跨ってきたのだ。前半身が驚、後半身が馬。

そう、前回紹介したヒポグリフのリスフィールだ。彼はヒポグリフに跨ってきたのだ。

「え？何ってヒポグリフのリスフィールだよ？昨日紹介したじゃないか☆」  
にへらくと笑ってリスフィールの頭を撫でる飛斗。

見た感じはペットを愛している美少女にしか見えない。

「それにこの格好、どうだい？似合うだろ？ほらほらー☆可愛いでしょ？ウ・サ・ギ☆  
びよんびよん☆」

バッチリウインクを決めてウサギ跳びのポーズをとる飛斗。

あまりのハイテンションさに天野夕麻はどつと疲れた。

「ごめんね。リスフィールの散歩とご飯の買い物はまだ済ませてないんだ。良かった  
デート前に乗るかい？気持ちいいぞ☆」

太陽のような華やかなニコニコな笑顔をする飛斗。

突っ込みたい気持ちを抑え、天野夕麻はヒポグリフのリスフィールに跨る。

「さして☆リスフィール!!今から散歩と買い物と同時にするぞ☆」

「クエー!!」

合図と同時に歩き出す。

車と同じスピードで車両を走り、信号が赤ならば止め、青になったら進む。車のようリスフィールは走り、まずは買い物済ませる。

「あら。飛斗ちゃん。今日もお散歩？」

優しいような肉屋のおばちゃんが飛斗に話しかける。

「どうやらここがリスフィールのご飯を買う所ようだ。」

「うん☆それと今日はリスフィールのご飯も買いに来たんだ☆だからおひとつくださいな☆」

飛斗は財布から1000円札と五百円玉を取り出しておばちゃんに渡す。

するとおばちゃんはお肉パックを渡してお釣りの200円を渡す。

「所で、後ろの女の子は誰だい？もしかして彼女かい？」

おばちゃんは微笑んで飛斗に言った。

天野夕麻は何も考えたくないと言った死んだような表情をしている。

「なんでヒポグリフに突っ込まないんだと突っ込みたくなかった。」

「うん☆今からデートするの☆」

普通にニコニコして返す。おばちゃんもはっはっはっはと笑って

「じゃあデートを楽しんできな!!」

「じゃあくね☆またお肉買いに来るよ☆」

そのままヒポグリフに跨る飛斗。

後ろにいる天野夕麻が話しかける。

「なんでみんなヒポグリフについて突っ込まないのよ!! 幻獣よ幻獣!!」

出発する前に疑問を突っ込みをいれる。

当然だ。幻獣とは空想上の生き物で本来ならば人間の目に見えるところで飼っていること自体がおかしいのだ。

しかも町の人はそれを受け入れているかのように日常に取り入れている。

「うくん、まあ最初は驚かれたけどだんだんと受け入れられてきた感じかなあ……それに、可愛いでしょ? リスフィール☆」

「クエー!!」

「はあ……もう疲れた……」

飛斗は子どものようにはしやぎ、リスフィールもそれに応えるように鳴いた。

天野夕麻は一誠とは違う超がつくほどの破天荒ぶりに振る舞わされて疲れている様子が見れる。

「もぐもぐ……リヒユフイーユ、ひゆぎはもっひよひやへひふひふほく」

「……食うか喋るかしなさいよ……てかなんでドーナツ食べてんのよ……」

「もぐもぐ、ゴックン。ふう……あ、食べる？最後の1個」

そうやって飛斗は夕麻にドーナツを渡す。

「……もういいわ……」

これから起こるデートに振り回されるのを想像した彼女は、どこか悟ったような表情だったと言う。

## デート本番と神器

「いや〜楽しかった〜☆またデートしようね☆」

「はあ……………はあ……………」

天野夕麻は竜胆飛斗の破天荒ぶりに疲れていた。

デートらしいことをしたのはしたが、彼自身の行動について行くのに精一杯で楽しくはあつたのだがそれ以上に疲れが圧倒的に勝っていた。

そう、それは昼頃まで遡る。

「さ〜て!! 買い物も住んだし、リスファイルとの散歩に洒落こもうじゃないか☆」

「え? ま……………待ってよ!!」

天野夕麻の静止も虚しく、リスファイルは高く舞い上がり、速く羽ばたく。

飛斗にとっては慣れていて楽しいだろうが、天野夕麻自身は自身の翅があるから飛ぶのは慣れているとはいえ、跨ってこのようなスピードで飛ぶのは初めてだ。故に……

「きゃあああああ!!」

こうなる。振り落とされないと事岳を考えて飛斗に目を瞑ってしがみつく。

「おおっ……!!楽しいかい?リスフィール☆じゃあもつと飛ばそ〜☆」

「クエー!!」

空中にいるヒポグリフを止めることは出来ない。

人目につこうと、ヒポグリフは速く高く飛ぶ。

風に乗ってるように気持ちいいため、それが彼らを興奮させてよりスピードを上げていく。

飛斗もリスフィールも嬉しそうに楽しそうにしているが、天野夕麻は怖くてたまらないのだ。

いくら墮天使で翅があってもこの速度で振り落とされたらたまらない。

しかもリスフィールはジェットコースターのように急速落下したり、くるくると回転して進んだりするからなおのことだ。

飛斗はそれをものともせず、むしろ楽しんでいた。

それが続くと、時刻は12時になり、散歩も終わりを迎える。

「つ……疲れが……」

リスフィールの散歩が終わって家に着く。

飛斗の家は家よりも庭の方が広い。

これはヒポグリフのリスフィールが遊ぶためだ。幼い頃、飛斗はリスフィールとずっと一緒だった。

跨ったし、散歩も欠かさずに行っている。

遊び道具のフリスビーやボールもリスフィールの小屋の近くに綺麗に整頓されている。

「じゃあリスフィール、ご飯はここに置いとくからね☆」

リスフィールの小屋の目の前に先程のお肉を皿の上に乗せて置いた。

リスフィールは「クエツ!!」と元気よく返事をして食べ始める。

「じゃあ……デート、行こ☆」

「え? あつ……!! ちよつ……!!」

飛斗は天野夕麻の腕を掴んで町へと走る。

本気で飛斗はデートを楽しんでおり、天野夕麻も疲れていながら一誠の時とは違う感じで楽しみにしていた。

(昨日の一誠の時は王道「デート……正直つまらなかつたわ。どうせ今回も……」)

内心ではこう思っていたが、それが違った。

例えば……

「ねえねえ☆これ似合うかな?」

「だから女物おとおお!!」

服屋の試着室で女物の服を着た飛斗を見たり（似合いすぎているのが困った）

「魔法少女!!アストルフォ!!ただいま見参☆」

「恥ずかしいからやめて!!」

魔法少女のコスプレをして決めポーズを取るという恥ずかしい行動を止めようとして  
たり

「見てみて!!大物☆」

「どこで捕まえたのソレ!?!」

彼の手には巨大な鯉が担がれていたり（後に泥ぬきして美味しく食べました。）

他にも色々……ぶっ飛びすぎてて疲れた……。

キャラを見失いながららツツコミに呈した天野夕麻だが、目的は忘れていない。

そして冒頭へと至る。時刻は夕方。

「ああく楽しかった☆」

ベンチに隣同士座って飛斗は大きく背伸びする。

「ありがとね☆ボクってこういうの初めてでプランとか練るのが苦手でさ……いつも通りしたけどどうだった?」

「いや!!あれがいつものなの!?!」

そう叫ばずにはいられない。あんなのが日常ならツツコミ疲れてもうダメになる。でもここで挫けずにはいられない。

計画を遂行してアザゼル様からの祝福を貰うために。

「ねえ飛斗くん、最後にお願いがああるんだけど……」

「うんうん、なに？」

前に一誠を殺した手口で

「死んでくれないかな？」

ニツコリと黒い笑みを浮かべて言った。

一誠ならここで恐怖を感じて震えていたが……

「おお飛斗よ……死んでしまうとはなさけない……」

某RPGに出てくる神父のモノマネをして返してきた。

流石に予想外だったのか、ドスをきかせた声で

「死んでくれないかな？」

そう言つて天野夕麻は正体を現す。

今日着ていたワンピースの衣装の代わりに黒いボンテージが彼女を包む。

一誠ならここで腰を抜かしたが……

「おおっ!!黒い翅だ!!かつけえ!!」

「え？ちよつと!？」

あろう事か翅を触ってきた。

こいつの思考回路はどうなっているんだと問い詰めたかった。

「おお!!すげえ!!もつふもふ☆リスファイル並とはいかないけどこれは……いい!!」  
笑顔でサムズアップする飛斗にレイナーレは呆れた。

「ねえ、今の状況わかってるの?」

「え?なにが?」

本当に分かかっていなかった。

それを知らせるために光の槍を作って木にぶん投げると木は切断された。

「これから貴方がこうな……」

「ねえねえ!!今のどうやったの!?!ボクにもできる!?!」

まるでかっこいいものを見た子供のようなキラキラした目でレイナーレを見た。

彼の目には大好きなファンタジーの登場人物が目の前に現れたような嬉しさが溢れ

出ている。

それを見たレイナーレはどうとう

「あのね!!私は貴方を殺せる立場にあるのよ!?!」

「はえくすつ☆い☆」

分かっていなかった……。

レイナーレは頭を抱える。

「貴方……死ぬのが怖くないの？」

「ふっ……生物はいずれ死ぬもの……そしてその時は分からないものさ☆例えば強盗や通り魔に殺されてしまうかもしれない……事故にあつて死ぬかもしれない……そういう物さ☆」

あっけからんと平然と言つてのけた。

それを見たレイナーレは呆れて

「……やめた……。貴方といると調子が狂いつばなしよ。」

「いや〜照れるぜ☆」

「褒めてない!!」

レイナーレは最後までツツコミ役を忘れない。

槍を取めて帰ろうとすると、頬をつままれた。

「えひゃい……ふぁにふるのふよ……!!」

頬を弄られてわからないと言つた感じをとるレイナーレ。

「いや〜……キミってしかめっ面だったからさ……笑っている方が楽しいよ☆それに、笑っている方が可愛いでしょ？1度しかない人生なんだ☆楽しまなきや損だよ損☆」

あつ、でも他人に過度な迷惑をかけるのはダメだからね☆」

最後にずいっと顔を近づける飛斗。

最後まで調子を崩されてレイナーレは去った。

「…………あれ？名前聞くの忘れちゃった…………まあいいか☆」

この男、理性が蒸発している…………。

一日が終わり、寝ていた飛斗は火山の頂上にいた。

「……………は…………どこかな？」

グググツと噴き出るマグマを見ながら言った。

「おいおい、ようやくかよ…………」

マグマから出たのは赤い龍だ。強そうな鱗や甲殻に炎のような熱さを持っている。

瞳と舌は緑で強靱な身体が見える。

「キミは誰かな？」

これ、聞かずにはいられない。

「はあ……………こんなのが俺の宿主とはな。俺の名前はファニール・イグニス。今は火炎の轟龍（バーストドラゴン）と呼ばれているがな。」

そこから丁寧に教えてくれた。

悪魔、天使、堕天使の三すくみ。過去の戦争、神器。そんなすごいことが裏にあった

のか……!!

「おお!!すごい!!」

「お前にも驚いたぜ。まさか裏を知る前に幻獣のヒポグリフを飼うなんてな。」

「えへへ☆」

照れるぜと言わんばかりにニコニコする飛斗。

そこから神器についての説明をする。

そして、今日の墮天使のことも。

色んなことがあった一日だが、飛斗はむしろ楽しむ気概を持ち合わせている。

「あと腹減ったからビザ持ってこい。直径5メートルのやつをな。」

「人間サイズじゃダメ?」

最後にこんなやり取りがあったという

リスフィール!!空からケンタウロスが!!

「あゝよく寝たあ……。」

ぐうつと背伸びをする飛斗。階段を降りてリビングに向かうと一人の少女が朝ごはんを用意していた。

竜胆龍騎（リンドウルキ）。飛斗の妹だ。

水色の髪をサイドテールにまとめ、前髪で両目を隠している。エプロンを着て流し台に朝食を置く。

今日は味噌汁に目玉焼き、ごはんと焼きジャケ。食欲をそそる。

「ああ……お兄ちゃん……起きたの……?」

しどろもどろに言う龍騎。彼女は人と接することが苦手だ。兄である飛斗にもしどろもどろに話し、他人と話そうものなら単語ずつしか喋れないのだ。

「うん☆……ごめんね……今日はボクが当番なのに……」

竜胆家の食事担当は当番制である。

「……気にしないで……これしか取り柄がないから……。」

飛斗は気まづそうに食事をテーブルに運んで麦茶をコップに注ぐ。

飛斗はお茶の入ったパックとコップを置いて龍騎が座るのを待つ。

龍騎が来たところで食べ始め、静かな空気が流れ始める。

時折飛斗が学校での様子を聞き、龍騎が昨日のデートについて聞いてきた。

話という話はこれだけで、片付け用とした時に

ドオオオオアアオオン!!

何かが庭に落下した音がした。

飛斗は急いで庭に行くと、リスフィールの小屋の前に煙が上がっていた。

「リスフィール!!」

飛斗が急いでリスフィールの元へ向かうと、小屋もリスフィールも無事だった。

だがリスフィールは煙の中心をつんつんしている音が聞こえ、煙が晴れると

……女性がボロボロの状態で倒れていた。

上半身は裸でもろ見えそうになっているが、特出すべきはそこではない。

下半身が異形だったのだ。

神話に出てくるスフィンクス……ケンタウロス……そのような感じだった。

「あはは……今日は休みかなあ……」

飛斗本人は苦笑いだったという。

最低限の応急処置を終え、服も昨日買ったやつを着せる。

ベッドまで運んで寝かせる。寝顔を見たあとにスマホで学校に連絡する。

「あつ、先生？竜胆飛斗ですけど、すみません。今日は休みますね。え？理由？家の近くに動物が怪我で倒れて家で応急処置したんですよ。いま寝かせて様子を見てます。あつ、はい。じゃあ。」

電話を切つてふう……と一息つく。

急須で入れたお茶を飲んでゲームをする。

そうした静寂の時間が流れたのだった。

「……………」

見知らぬ天井が見える。

あの時あの悪魔の一撃を受けて死んだはずなのに……

そう思っていると声をかけられる。

「ああ、お目覚め？」

あの女とは違う、桜色の髪が見えた。

腹が立つほどに、狂おしい程に憎悪が私を襲った。

だけど激痛で動けない。

「ダメだよ？あんなに怪我してたんだから。怪我人は大人しく寝るべき☆」

そう言つて飛斗はバイザーに毛布をかけてやる。

バイザーは悔しそうな顔をしながら憎々しげに飛斗を見るが、手にはナイフでりんごの皮を剥くのが見える。

ただ不器用なのか危ないところがあった。

何とかして剥こうとするが、手が滑つて指を切つた。

「いった!!」

直ぐに血が出た指を口にくわえて血を吸う。

少し経つたところでまた剥き始める。

ところどころ危ないところがあったが、全部のリンゴが剥けて切る作業に移る。

流石に切ることは簡単に終わり、そのままバイザーの後ろに置く。

「じゃあボクは絆創膏を貼ってくるから食べて待つてなよ☆」

ウインクをかましてとてと歩く。

なんなんだと思いつながらリンゴを食べる。

形はお世辞にもいいとは言えず、皮に食べられる部分がいくつもついていた。

八つ当たりをするようにリンゴにかじりつく。

「おおっ、回復早い!!」

扉の方を向くと飛斗が入ってきた。

怪我した指に絆創膏を貼った状態で湯呑みを持ってきた。

近くに座って中身を飲む。匂いにお茶だろう。

「ボクは竜胆飛斗。しがたない男子高生さ☆」

「……バイザーだ。てかお前そのなりで男オ!?!」

男とは思えない肌と可愛らしさだ。人形のような精密な感じで声変わりもしていないのだろう。

「あはは……よく言われるんだよねえ……」

苦笑いをしながらお茶を飲む飛斗。

「いやあ……リスフィールの時もこんな感じだったのかなあ……」

しみじみと思いつくような仕草をする飛斗。うーんと考えてぼんと手を叩く。

「そうだ!!キミ、ここに住みなよ☆」

「はあ!?!」

コイツは何を言っているんだ?はぐれ悪魔でこのような身体だぞ?怖くないのか?と思つたが期待に溢れるようにキラキラした目をしていて断れる雰囲気じゃなかった。

「いやあ……正直二人暮しは寂しくてねえ……ここも元々は6人で過ごすスペースあるし、広くて広くて……リスフィールもいるけどそれでも寂しくて……話せる相手が欲し

かったんだ☆」

ウインクして指をパチンと鳴らして伸ばす飛斗。いいこと思いついたぞ!!という雰  
囲気が強く、何より彼のお花畑のようなオーラが断ることを和らげているような感じが  
する。

「あ……ああ……」

私はコクリと頷いてしまった。

飛斗は「パアアア」と子供のような笑顔を浮かべて

「やったあ☆家族が増えるよ☆やったね龍騎ちゃん!!」

「それやめて!!」

奥にいた龍騎がツツコミを入れる。

「バイザーはボクと龍騎の話し遊び相手、そして家族として迎えます☆リスフィールと  
も仲良く遊んでね☆」

バイザーはというと、この出来事に呆然としていたが、フツ……と軽い笑みを浮かべ  
た。

## バイサー、初めての散歩

「バイサーくんはこの町は初めてだろうから案内するね☆」

お昼ご飯を食べ終わって一息ついた3人。

飛斗がバイサーに向けて言った。

家族として迎える以上、町の構図は知つていた方がいいという配慮だ。

だがバイサーの下半身は巨大な虫のようなものになっており、下半身だけでも2mくらいある。

さらに上半身の人間部分と合わせて3m以上ある。

「だが、いいのか？私の身体はこんなんだぞ？」

「そこは問題なし!!リスフィールという前例があるし大丈夫でしょ☆」

「おにいちゃん……楽観視しすぎ……」

疑問を投げかけるバイサーに、大丈夫でしょと軽く言う飛斗。

リスフィールを初めて散歩した時は皆から驚かれたが、今ではすっかりとリスフィー

ルも町に馴染んでいる。だからこそその散歩だ。

そんな飛斗を心配する龍騎。

「じゃあ善は急げだ☆行くぞー? (??) (\* ) ? ♪」

「はあ……どうなっても知らんぞ。」

バイサーは背を向けて歩く。

その背を見て飛斗は思いついた。

……そうだ!! リスフィールみたいに背中に乗ろう!!

そう思うと龍騎を抱き抱えてバイサーの背中に跨る。

「お……お兄ちゃん!」

「どうして背中に乗る!? 降りろ!!」

龍騎は飛斗に抱きかかえられたことに驚き、バイサーは乗られたことに少し怒った。

「じゃあ☆しゅっぱつだ☆」

子どものようにニコニコしながら飛斗は無邪気に言う。

バイサーは少し怒りに顔を染めるが、子どものようにはしやく飛斗を見てはあ……とため息をつけて出発した。

「おお☆すこい!! ファンタジーであ〜 (( ( ( \* \* ) \* ) ) )」

バイサーが歩く度に目をキラキラさせて興奮する飛斗。

バイサーは例えるなら魔物娘や人外娘といったところだろうか。

怪物と人間の合成獣、ケンタウロス、それがバイサーだ。

龍騎は諦めたように手を額に当て、バイサーはモヤモヤした気持ちを表情に出す。

そんなこんなしてるうちに駒王学園に着いた。

「……」がボクと龍騎の通ってる駒王学園さ☆

指をさして紹介する。

飛斗は2年、龍騎は1年だ。バイサーがそこに入ったらどうなるか考えたが、下半身の都合上無理な話ですぐにやれやれと言った感じで諦めた。

既に下校時間は過ぎているため、バイサーを連れて校門に入ることが出来た。

生徒がバイサーを見て驚愕しているが、飛斗は気にとめずに寧ろ喜んでいた。

下駄箱の入口の近くに行くと、飛斗の担任の先生が見えた。

「あつ……せんせー☆」

飛斗は横から顔を出して先生に呼びかける。

先生は気づいたのか飛斗の方へと走る。

「おお、飛斗か。つて、龍騎も一緒か!!」

「……………」こんにちは……………」

あつはつはつと豪快に笑いながら言う先生とオドオドしながら小さく言う龍騎。

しかもバイサーに乗っている飛斗の影に隠れながらだ。

トラウマからか、他人を避けるほど苦手なようだ。それを見た先生はバツの悪そうな顔をする。

「そ……そう言えば動物の治療で休むと言っていたが……」

話題を変えようと無理矢理話す先生。

その問いに待ってましたと言わんばかりに目を輝かせる飛斗。

「よくぞ聞いてくれました☆今乗っているこの人こそボクが拾った新しい家族のバイサーだよ☆」

(＊、ω、＊) ドヤツと顔を嬉しきで染める飛斗。

先生はというと、また色物か……と言った感じだった。

「お……おう……」

「バイサーを案内するついでに先生に報告しに来ました☆じゃあまた明日☆」

手を振りながら言う飛斗に、先生は見送るように手を振った。

……ヒポグリフの他にペットを拾ったのか……

そう思いながら先生は職員室に向かった。

場所は変わって駒王町。

「そこをまっすぐ行くと喫茶店があるの☆そのケーキが美味しいんだよ（（○）＊  
▽（＊）○）」

（、艸、）のような顔をして案内する飛斗。

龍騎は飛斗と一緒に来たことがあるため、また食べたいと思う気持ちがあり、バイサーはどうでもいいと言った雰囲気をしていた。

喫茶店に着くと、見覚えのある顔が見え、1人は知らない顔だった。

金髪のシスター服の女の子。どう見てもこの町の人じゃない。

留学生かな?と思った飛斗と龍騎。

そして女の子を企んでいる顔で抱いているレイナーレと助けようとする一誠に遭遇する。

「バイサー!?!」

一誠はバイサーを見てより気を引き締めるが、それをぶち壊す者がいた。

「わくわく☆モッフモッフだあく☆」

「きゃあああ!?!」

そう、竜胆飛斗である。

レイナーレの翅を見た瞬間、翅をモッフってレイナーレが焦っている。

それを見た一誠はポカーンとした表情で佇み、バイサーと龍騎はやれやれと言った感じだったそうなの。

何度も締まらない。それが竜胆飛斗クオリティである。

## レイナーレの翅をもつふもふ

「おお〜!!すつごいもつふもふだあ〜( ( ( \* . ω . \* ) ( ) )」

レイナーレの翅を触つてモフる飛斗。

突然の事に戸惑う一誠とアーシア。

やれやれと言った感じで見るバイサーと龍騎。

そして……

「きゃああああ!?!」

突然モフられることに驚きを隠せないレイナーレ。

「おおつ……!!よく見れば天野夕麻ちゃんじゃん!!二元气してた〜?」

ハイテンションな口調でニコニコしながら手を振る飛斗にレイナーレ

「私は天野夕麻じゃなくてレイナーレ!!墮天使よ!!」

顔を赤らめて必死に引き剥がそうとするレイナーレ。

彼女には人間にモフられた屈辱と恥ずかしさ、人間風情に好きにされた怒りが混ざりあっている。

「レイナーレ……墮天使……ねえねえ、原因と結果の逆転とかできる?」

「……え？出来るわけ無いでしょ!？」

飛斗の素朴な疑問にレイナーレは叫んで突っ込む。

「え？パンチを当てる結果を先に出してパンチを放つ原因を後から出したり、身体が二つに分かれて連携したり剣で舞って凄まじい攻撃をしたり、翅の音色で人を狂わせたりするのが墮天使だつて聞いたよ？」

「いや!!墮天使はそんなこと出来ないからね!!?それ違う墮天使だからね!？」

飛斗が凄まじい事を言うことに必死につっこむレイナーレ。

そんな漫才は結構な時間続いた。

「……で、なんでバイサーがいるんだ?」

一誠がバイサーに向かって指をさして指摘する。

はぐれ悪魔のバイサーはリアス・グレモリーや塔城小猫、木場祐斗からフルボッコにされた上にリアスから滅びの魔力を受けたはずだ。

バイサーは口を噤む。はぐれ悪魔として生活していた罪悪感が飛斗と触れ合っているうちに生まれたのだ。

だが、こんな重い雰囲気をぶち壊す陽気な声が聞こえる。

「うん?今朝バイサーが降ってきたから手当てして家族として迎え入れたんだよ☆」

サラッとレイナーレをモフリながら発言する飛斗。

「だから離れなさい!!」

必死に引き剥がそうとするレイナーレ。

バイサーと龍騎は「はあ……」とため息をついた。

「あと……レイナーレ様とこちらの女の人は……?」

アーシアが弱々しい声でレイナーレに聞いた。

「ふっ……!!なんと!!ボクとこの人は昨日デートした仲なのサ☆楽しかったゾ☆」

「いや!!私はコイツのトンデモに付き合わされただけよ!!」

「嘘でしょ……!!うう……よよよ……」

ぺたりとへたり混んでよよよ……と泣き真似をする飛斗。

「……私たち……空気じゃないか?」

「……言わないで……」

バイサーと龍騎が呆れたように言った。

そんなやり取りが続いていると、後ろから声が聞こえた。

「あら? 飛斗じゃない。どうしたの?」

「あつ!! テンプティ・ダークスフィアさん!! 今日仕事?」

飛斗が振り返って見ると、水色のウェーブのかかった髪の絶世の美女がいた。

「ええ。あと、竜胆兄妹に仕事の依頼よ。一緒に着いてきて。」

「え？ホントですか!?! やったく!! 龍騎!! バイサー!! すぐ行くよ!!」

「ありがとうございます。テンプテイさん。」

飛斗はテンプテイにお礼を言つてレイナーレを抱えて直ぐにバイサーに乗る。

龍騎もお礼を言つた。

「テンプテイさんも乗つて乗つて☆」

「もう乗つてるわよ。」

「行動早!!」

一番後ろに乗るテンプテイにレイナーレはツツコんだ。

はあはあと息を切らす。

バイサーは歩き、一誠とアシアはポカーンと言つた感じで見送つた。

なにがなんだかわからないという思いが2人を支配する。

そして、バイサーがテンプテイの支持の元たどり着いたのはスタジオ。

そして、テンプテイが表紙の雑誌が見えた。まだ発売されていないものだ。

そう、テンプテイ・ダークスフィアはファッションモデルである。

## セブンソードプロダクション

テンプティと一緒に来たのはとあるスタジオ。

まるで古代の遺跡を思わせるような外観に、中は古いお城のような造り。

そして入口の上にあるプレートには「セブンソードプロダクション本部」と書かれている。

また、レイナーレが立ち読み用の雑誌を読むと、7人のスタッフ兼モデルが写っている。

水色のウェーブのかかった絶世の美女、テンプティ・ダークスファイア。

水色の髪をワイルドに切りそろえ、鎧兜に身を包み、剣を構える男、ノエル・ダークスファイア。

蝶を模したような美しい着物を着こなし、美しく微笑む金と青のメッシュのかかった美女、ナリアス・サイコフレイム。

高度な人形を作る目隠れのイケメン、オーント・マリオネット。

半分金髪で半分白髪の厨二病の女性、ラクシナ・ソウルステイル。

青とピンクのメッシュのかかった髪をなびかせるイケメン、メビエラ・メイルシュトローム。

筋肉質の肉体派の逞しい男、ダグラス・ストーンエッジ。

「……………」

雑誌を読んでいるとどの服も美しく着こなしている。

ページをめくっていくと、竜胆飛斗と竜胆龍騎の写真があった。

二人とも可愛らしい服を着ており、龍騎はオドオドしていて保護欲を掻き立てられ、飛斗は笑顔でピースしており元気なイメージを感じさせる。

「さて、竜胆兄妹と……………痴女？ここがセブンソードプロダクションの社長室よ。」

「ネイラズター・ブネさーん!!失礼しまーす!!」

「……………お兄ちゃん……………はあ……………」

「つて!!誰が痴女よ!!おかしいでしょ!!」

テンプティが社長室へ行き、社長席の前の席に座っているのは着物を着た金髪の女性。

「竜胆兄妹……………と、誰かしら?」

肘を机の上に立て、顎を手に乗せてレイナーレを見るネイラズター。

その高圧的な威圧感にレイナーレは少し震える。

「レ……レイナーレ……です……。」

ネイラズターはレイナーレをじっと見据え、考える。

彼女の机の上には「社長代理」と書かれたプレートが立てられている。

「話に入るわ。竜胆兄妹、仕事の依頼よ。」

「おおっ!! 待つてました!!」

「ありがとうございます。」

飛斗はニコニコして龍騎はぺこりと一礼する。

テンプティに案内され、撮影する場所に通される。

背景は無地の布がかけられている。

カメラを持っていくスタッフに一礼し、今回の監督役である緑の髪の中性的な男、マリユーカー・フォルネウスが最終チェックをしている。

「来たか……。」

「マリユーカーさんおはようございます!!」

「おはようございます……。」

2人はマリユーカーに挨拶し、服を着るように奥へと案内される。

その後、フリフリのスカートやかわいらしい女の子ものの服を着こなし撮影する。

飛斗は太陽のような笑顔で、龍騎はオドオドしている感じで写真を撮影する。

出てきた写真を見ると、相反するが、仲のいい姉妹に見えてくる。

無事に撮影が終わり、ギャラを貰ってさよならの挨拶をしてバイサーに乗って帰宅する。

「あの人達とどういう関係なの?」

レイナーレが聞いてきた。

「ああうん、親代わりかなー。いやあ……ボクが中学生の頃くらいに両親が殺されたみたいで惨殺されてさあ……ああして仕事もらって生活費を報酬で貰ってるわけ。あの人たちに会わなきゃ今頃野垂れ死にしてるね☆」

「笑顔で言わないでよ……はあ……」

「はああああああ!?!」

レイナーレは目を見開いて驚いて飛斗の肩をぐわんぐわん揺らす。

「……五月蠅い……」

背中であんなやり取りをしている様子をバイサーは呆れたように呟いた。  
そんな様子が帰宅するまで続いたという。

## 設定その1

### 竜胆飛斗

身長、レイナーレよりも6cm低いくらい

名前の由来は花の竜胆とシャルルマーニュ12勇士のアストルフオから。容姿イメージはエンサガのロックブーケとFateのアストルフオを足した感じ。

性格はハイテンションで基本的には楽観的。思いつきでバイサーを拾い、家族（ペット扱い）として迎え入れる。妹の龍騎が大好きなのだが幼い頃守りきれずにいた事をしてしているがギクシヤクしている。（龍騎は気にはしていないが）

pixivの方に投稿しているミカゲとは対照的なキャラ。

成績は学年の半分よりちよつと上くらいだが基本的に脳筋でバカ。

髪色はマゼンタ。肌の色はちよつと白に近い感じ。イメージCVは花澤香菜さんを妄想してます。

### レイナーレ

至高の墮天翹を目指している女。

ミカゲ編と違い、原作通りの動きだが飛斗と関わることでなんか苦労人のツッコミポイントに収まる人となった。

第一印象は痴女。外出する時とかどうしてるの？（しみじみ）

ほか3人も同じ感じで割愛。ちなみに飛斗の好みに近いのはカラワーナ。

### 竜胆龍騎

飛斗の妹で性格は対照的に大人しめでネガティブ。

伸ばした前髪で目を全体的に隠し、サイドテールにまとめた女の子。

身長はレイナーレよりも10cm低いくらい。

幼い頃酷い目にあい、飛斗は守ろうとするけど逆に返り討ちにあってしまう。そこから不登校気味になり、飛斗と接そうとするけど怖くてオドオドしてしまうようになってしまったほど弱ってしまった。

神器持ちかは不明。バイサーとの関係は良好な感じ。

容姿イメージはクロスアンジュのクリスとISの簪を足した感じ。イメージCVは小倉唯（低いボイスの方の）さん。

バイサー

指名手配中のはぐれ悪魔でリアス達にフルボッコにされた女性。

下半身は巨大虫のような感じ。

今作では消滅ではなくぶっ飛ばされて飛斗の家の庭に墜落した感じで治療を受ける。そこから飛斗は家族として迎え入れる。

名前の由来はサーバインかなあ（勝手な想像）ずっとバイザーだと思ってた俺は悪くないはず。

一応人間体にもなれるが基本的に飛斗達を背中にものせて歩くという半分乗馬？的な感じになっている。リスフィールとの関係は結構いい感じらしい。

リスフィール

竜胆家のペットであるヒポグリフ。生物的には雌だが特異体質のため無性（両性）。こまけえこたアいいんだよ!!

飛斗の龍騎が幼い頃に庭に墜落した個体でそこから懐くようになった。幼い頃2人とめいっばい遊び、食べ、寝た関係のため深く繋がっている。

ヒポグリフがグリフォンよりも幻獣と呼ばれる所以は鷹のエサ候補に馬があるため、その鷹と馬の合成獣は普通はありえないため。鳴き声は「クエ!!」系や「ヒポ!!」系の

2種類。毎日の散歩は欠かさず行っている。（雨や嵐の日などは除く）

### 飛斗の神器

深層イメーჯは火山の火口で赤い身体、緑の瞳と舌が特徴のドラゴンで神器に封印された存在。どうやらピザが大好物らしい。なんでも氷の兄がいるとか。元ネタわかる人いますかね？

## オカルト研究部とピザ大好き炎の龍

昨日は忙しかった。

バイサーを拾って治療して迎え入れて紹介して。

背中に乗って街に行つて一誠達に紹介してレイナーレに会つてセブンソードプロダクシヨンで仕事して。

字面だけ見てもなんかすごそうな気がする。

さて、そんなボクはと言うと……

「あ〜う〜。放課後だ〜。」

教室の学校の机の上でぐ〜んとしている。本当に授業は退屈だ。

数学とか本当に苦手でコイツだけはほんと無理……。

『おい、ピザはまだか。』

神器の中に眠っている赤い龍が言ってくるよ〜。

ファニール・イグニス。「火炎の轟龍」って呼ばれてる炎の龍で昔は火山の頂上にいたらしい。マグマを風呂のように使つて浸かり、時にはテリトリーに入った者を頂上から

砲撃して狙い撃ち。更には頂上に来た悪魔や天使、墮天使を口から出す炎の砲撃で落下させ、時には口に入れて食していたらしい。更にはピザを供物として与えた者にはフリーパスのようなものを与えていたらしい。龍の威厳つてなんだろう？

「それにしても、封印された過程がピザを利用したあからさまな罠に引つかかるっていうね……」

『うぐつ……!!仕方ないだろう!!あの時は腹が減っていて目の前に直径5メートルの具沢山のピザがあつたんだぞ!!』

「引きこもってご飯を探すのを面倒くさがってるからだよ。自分から出向けばこんなことにはならなかったのにね。」

『う……うるさい……!!』

(この龍……本当にすごい龍なのかな？すつごいぐだぐだな感じがあるんだけど……)

「竜胆飛斗くんだよね？」

教室のドアが開き、そんな声が聞こえる。

「あ〜う〜？」

ドア方向を見ると金髪のイケメンがそこにいた。

木場祐斗。それが彼の名前だ。

「ちよつときてくれないかな？」

「うん？いいよ。」

ボクは軽く返事をしてそのまま席を立て木場くんの後ろに着いていく。

途中で「木場×竜胆」とか聞こえたけなんなんだろう？木場くんに聞くと苦笑いして誤魔化していた。

「むう〜!!なんなのさ〜!!」

ボクは頬を膨らませて不機嫌っぽく言った。

「部長。連れてきました。」

木場くんがドアをノックして言うと、「どうぞ」という声が聞こえ、木場くんはドアを開ける。

すると、目の前に映った光景は黒魔術でもするのかつてくらい不気味だった。

書かれている魔法陣や飾られている鹿の剥製とか黒魔術や召喚魔法を使いますと言っているようなものだ。

「エロイムエッサイム〜。エロイムエッサイム〜。」

「こう言わずにはいられない。」

今から黒ミサをやるのだ。サンタさんに会うためにトラバサミやネズミ捕りを仕掛けたボクに穴はない!!

「やめなさい。」

本を読んでいた部長と呼ばれる女性はハリセンを持ってボクの頭をスパコーンと叩く。

「いったら!! 飛斗くんの脳みそが左右に割れたよ!!」

おーいおいおいと大袈裟に泣き真似をする。

「良かったですわね。これで左右で交互に考えられますわよ?」

「おおっ!! そっか!! その人あったまい!!」

いいことを思いついたように手をポンッと叩いて朱乃に指を指す飛斗。これがファーストコンタクトである。

「……俺は?」

「知りません。」

無言でお菓子を食べる小猫と展開についていけない一誠だった。

## 勧誘か会談か怪談か

「粗茶ですわ。」

「おおっ!!ありがとー!!」

ソファアーに座って朱乃から粗茶を受け取る飛斗。

そのまま湯のみの底を左手で持つて側面を右手で持つ。ズズズーと飲んでぷはーと一旦口を離し、机に置いた。

「ふう……お茶は美味しいですな。」

そう言つて湯のみに口をつけた部分を手で拭き取る。

「さて、要件を聞こうではないか♪」

「いや、なんで貴方が偉そうなのよ……。」

どこにいてもぶれない。それが飛斗くおりてい。

1年前から飛斗の一応の人となりは知つてはいるものの、こうして直に見るのは初めてだ。

「さて、知つてると思うけど私はリアス・グレモリーよ。」

「姫島朱乃ですわ。」

「竜胆飛斗だよ。」

一通り自己紹介を済ませた上で要件を話すリアス達。

自分たちが悪魔であること、悪魔がすること、部員（眷属）の紹介を一通り。その際に飛斗の目がキラキラしていたことは言うまでもない。

「……つまり悪魔さんは『僕と契約して魔法少女になってよ。』って言う白い猫ウサギのよくなものなんだね。」

「いや、それだと契約者がいずれ魔女になるじゃないの!!魂を結晶化なんて出来ないわよ!!」

リアスが呑気にお茶を飲んでいる飛斗に向かってツツコミを入れる。

「ん?リアスさんが悪魔つてことはソロモン72柱の悪魔?」

「ええ。……でも、先の大戦でたくさんの悪魔が死んでそこまで残ってはいないけどね。」

そう言うリアスは少しため息をつく。どうやらこれは重い話のようだ。

しかし

「……つまりこの姿は仮の姿で真の姿はモ●ルアーマーと戦った72機いたとされるガンダ●フレームという事だね!!」

てへぺろ顔でサムズアップする飛斗を尻目に

「違うわよ!!それ!!私は阿頼●識搭載してないし18メートル級のモビ●スーツじゃないわよ!!」

「じゃあ目が沢山あつて素材を沢山落とすやつ?」

「それも違うわああああ!!」

リアスがハリセンでパコーンとツツコミを入れる。しかし今回は動じずに落ち着いてお茶を飲む。

「……飲む?」「もう無いじゃないの!?!」

はあはあとツツコミ疲れてドサツと乱暴にソファーに座るリアス。それを見て朱乃が「あらあら」と笑っている。

閑話休題（それはともかく）

「で、貴方は何なのかしら?」

「と言うと?」

首をこてんと傾げる飛斗。それは可愛い美少女がやっているみたいに様になっており、一誠なんて顔を赤らめているほどだ。

「決まってるじゃない。昨日一誠から聞いたけどはぐれ悪魔、バイサーの背中に乗って

街を歩いて墮天使、レイナーレをそのままバイサーに乗せて去ったそうじゃない。」

リアスの目付きが険しくなる。

それもそうだろう。一誠を殺した墮天使と一緒にいて、討伐したはずのバイサーと一緒にいるのだ。関係があると間違いないと思っただけだ。

「ふふふ……それはね……」

急に雰囲気が変わる。飛斗が悪の幹部みたいな意味深な笑みを浮かべた。

「朱乃さ〜ん!!お茶お代わり〜!!」

朱乃以外の全員がずっこけた。

「う〜ん……そう言ってもねえ〜……バイサーは空から女の子が!!状態で治療して家族として迎え入れただけだし、レイナーレ?天野夕麻?もデートしてからボクが彼女になっただけだし」

お茶を飲みながらすらすらと答える飛斗。それを見て「ホントかなあ?」と疑いの目を向けるグレモリー陣営。特に一誠。

飛斗はどこ吹く風で落ち着いてお茶を飲んでいる中

「邪魔するよ。」

「……」が竜胆飛斗の通っている高校か?」

オカルト研究部の扉が開かれ、そこには2人の男がいた。

1人は体育会系のような筋肉質の男で長い赤髪を伸ばしている。目つきは鋭く、硬派な武闘派の男と言った印象だ。

反対にもう1人は青い髪を整えているように伸ばし、キューティクルも完璧なイケメンの男。どこか華やかさを印象づける。

「おおっ!!八岐美天（ヤマタビテン）さんに蜘蛛崎龍牙（クモザキリュウガ）さんじゃん!!」

思わぬ来客に大きな反応をする飛斗に「何故ここに!?!」とも言いたげな顔で見る一誠以外の部員。

「おっと、今日はオフなんだ。そしてその人達。宜しければお近づきの印にどうぞ」

そう言って美天と呼ばれたイケメンが差し出したのは自分のブロマイドと龍牙、美天、飛斗、龍騎が写っている写真。それを見て「あはは……」と苦笑するオカルトメンバー。

「そうじゃ。飛斗。むしろもこの高校の生徒になるきに。」

「転入生という扱いだよ。マネージャーが高校に通えって言うてたし、たまにはこういう息抜きみたいなのは悪くないかなって。」

「やったぜ!!イエー!」

3人で盛り上がり、今日は解散となった。

一誠 「俺ら空気……」

小猫 「知りません。」

木場 「あはは……」

## 転入生現る

翌日、2人の言葉通り転入生が来た。壇上に立って、黒板に2人の名前が書き出される。

「初めまして。ボクの名前は八岐美天。よろしく。」

「わしは蜘蛛崎龍牙じゃ。よろしゅう頼む。」

華やかな男と武闘派な男。2人がこのクラスに来た瞬間に歓声が大きかった。特に女子から。

たまにどっちが受けでどっちが攻めといった質問があつたが、美天が軽くあしらつたのは印象的だ。

席としては飛斗の両隣りに彼らがいる。

1人はイケメン。

1人はワイルド。

1人はかわいい。

しかも3人とも雑誌に載っている現役のモデルである。見てる人なら知らない人はいない。

時刻はは変わって昼休み。

「おやおや、どうやら注目を集めてるみたいじゃないか。」

フツ……とニヒルな笑みを浮かべてサンドイツチを食べる美天。

その顔は満更でもないようだがどこか諦めたような表情を飛斗に向ける。

「大丈夫なの？2人とも。」

「大丈夫じゃ。わしは軟弱な鍛え方はしとらん。」

「同僚とはいええ、心配してくれる人がいるだけで十分さ。」

飛斗の心配をなんでもないと言う2人。

ちなみに飛斗は自作の弁当で、龍牙は牛丼である。

「それにしても驚いたね。君の家に人外がいるなんて。」

「全くじゃ。この星にはあのような面妖な者までおるとは。」

2人が言っているのはバイサーとリスフィールの事だ。

まあリスフィールの事は知ってはいたのだが、間近で見たのは初めてだ。その上、下半身が巨大虫のバイサーまでいる。

「それにしてもあの女は強かったのう。また手合わせ願いたいものじゃき。」

「いや、素手で互角にもちこめる君の方が人外じゃないかな。それに、まだ奥の手を隠し

ていたじやないか。」

「まあセブンスードプロダクションのスタッフが人外的な強さだしねえ……」

はっはっはと、豪快に笑う龍牙に同調するように笑みを浮かべる美天。それを見てのほほんとお茶を飲む飛斗。

ちなみに食べているところは屋上である。

「しつかしこはええのお。景色も中々。人も来んし。」

「まあ落ち着けるのは確かだね。」

「ほんとにね。」

2人が転入してからというものの、皆が憧れるような眼差しですつと見ていたのだ。何しろ有名人がこの場にいるのだから。

3人が楽しく弁当を食べているところに

「あつ。おーい。こつちこつち〜!!」

上空に手を振る飛斗。

美天と龍牙がそこへ視線を送ると3人の女と1人の男がいた。

ゴスロリ金髪ツインテールの少女。微妙な目隠れのボディコンスーツを着た青髪の女性。ボンテージ衣装の黒髪の女性。シルクハットとトレンチコートを羽織った中年の紳士を思わせる男性。



をする。それを見た4人は座り、大きなバスケットの蓋を開くと大量のおにぎりとサンドイッチが詰められていた。

「ふむ。中々の味だね。」

目にも止まらぬ速さでサンドイッチをひとつ頬張る美天。

ふう……と安堵するカラワーナとミツテルトだが、レイナーレは肩を震わせていた。「ちよつと!?!何勝手に食べてるのよ!?!」

「まあ、いいじゃないか。減るものじゃないし。」

「減っているのよ!!現在進行形で!!」

「そりや食べ物だから減るに決まってるだろう?」

美天を睨みつけるレイナーレとどこ吹く風と食べる美天。

「ふおふえふおひうひいひお。」(もつきゆもつきゆ)

声が聞こえたのでレイナーレが飛斗を見てみると、リスのように頬張っていた。

「食うか喋るかどつちかにしなさいよ……」

もう呆れて怒る気にはなれないレイナーレはため息をついたのだった。

それを見た飛斗は自分の弁当の1品を分けることになる。

喧嘩するほど仲がいい？

わいわいと昼食を食べている飛斗達とレイナーレ達。

弁当の一品を取り合い、それを食べて愚痴を言い合うとかそんな感じだ。

「それでな……私の所の組織は私達のような底辺の者に住みにくくてな……もうやばい……」

ドナーシークがいつの間にか酒を持っていてそれを飲みまくったせいで居酒屋にいるようなサラリーマンの愚痴のようなことを言ってきた。

「まあセブンソードプロダクションも最初のうちは研修のために違う部署で下積みつて言うのはあつたけど。」

「そうじゃないんだよ!!上の者は考えている人少ないし下は下で蹴落として成り上がるうとするものばかりだしさあ……!!」

しまいには泣き出す始末。大人になるとこんな苦労があるのか……。

もはやバーにいる飲んだくれの愚痴になってきたよ……（・ω・）

「で、墮天使はどう言ったものじゃ?」

「ああ、基本的には天使とそんなに変わらないが、神器所有者を見つけて保護したり狩ったり、はぐれ悪魔の討伐だな。」

おい墮天使……仕事内容を初対面の人に話しているのか……？

「ふむ……飛斗から聞いた話だと人間を狩って生○の樹の養分にしたたり機械人形を送り込んだり原因と結果の逆転を持つたり精神体だったりと聞いたが……。」

「それ、別の墮天使。」

龍牙の思う墮天使の事をばつさりと真顔で斬り捨てるカラワーナ。

「平和っスね〜」「そうだね〜」

やけ酒をして愚痴を言っているドナーシックを他所にお茶を飲んでのほほんとするミツテルトと飛斗。ある意味この2人が1番マイペースかもしれない。

「大体こんな衣装を着てラーメンとかを食べる時や外出なんてアホのすることだろ？キミ、見てくれはいいいけどファッションに関しては3流だね。」

レイナーレのボンテージ衣装を見てから評価する美天。

「ふん!!これは動きやすさを重点的に求めた結果よ!!」

「動きやすいつたって防衛はどうするんだい?」

「当たらなければどうということはないわ!!」

「じゃあ自分より実力が上のやつと戦ってそう言えるのかな？ 大体外に出る時もこの衣装とか……僕が身内なら恥ずかしくて外を出歩けないね。」

やれやれと言った感じで言う美天とぐぬぬ……!!とと言うような表情のレイナーレ。しかも美天は「はっ!」と言うような鼻で笑うような表情が拍車をかけている。

「そういう貴方だつて写真を見る限りではキザつたらしい事この上ないわ!!なんなのよこれ!!バラを口で啜えてキメ顔まで撮っちゃつて!!」

レイナーレはそう言うのと胸の谷間から雑誌を取り出してそのページを開いたままだ。いとと美天に近づける。

おい、それどうなつてんの？ 四次○ポケット？

「これは出版社の依頼だよ。まあ、僕の美しさを引き立たせるための要素が1番入つてからからね!!気合が入るのは当然さ!!」

「あく私知つてるわよ。そういう人をナルシストつて言うんですつてね。」

得意気に言うレイナーレに少し青筋を浮かべる美天。どうやら立場が逆転したようです。

「はっ!!言うじゃないか。流石は堕ちた天使様。皮肉も上手いようだ。崇めた方がいいのかい?」

「お生憎様ね。そういつた崇め方は丁重にお断りさせていただくわ。ナルシストさん。」

「おやおや。流石露出狂。言うことが違うじゃないか。」

「なんとでも言うがいいわ。しかもプロフィールで嫌いな食べ物がピーマンとか子供？お子ちゃまねく。ふふふ……」

なんとも内容が幼稚な気もするのは気の所為だろうか？

「それに、これは何かしら？」

美天にスマホを近づけて動画を再生する。そこには美天が映っており、歌っているよ  
うだが……。

「ああそれか。コイツ、歌は絶妙にヘタクソじゃき。」

「そうそう。3人でカラオケ言った時イケボの音痴って結構話題になってたよね。」

「しかもその点数ときたら30点……わしより下手ってどういうことぞよ。」

「うわ……酷いっスね。これ。」

飛斗達も同じものを再生したようで龍牙と飛斗はその事をしみじみと思い出す。

「う……音痴だからってなんだと言うんだい？」

「べつつにく。ただナルシストで音痴って典型的よね。」

「ふふふふふふ」「はははははは」

レイナーレと美天がわらって……

「上等だ表出ろやコラアアアアアア!？」

キレた。その場で二人が喧嘩しているのを見てやけ酒をしているドナーシーク以外  
のメンツは唾然とした。